

4. 著名な人相見のはなし

聖徳太子・鈴鹿翁・水野南北



聖徳太子の話

① 聖徳太子伝 補註 / 五天良空 (国文学研究資料館蔵 ヤ 2-168-1~10)

平安時代前期の歌人 藤原兼輔 (877-933) 撰の『聖徳太子平氏伝』ともいわれる延喜 17 年(917)成立の編年体の詳細な聖徳太子の伝記に注を付けたもの。

本書にある「崇峻天皇元年(588)戊申春三月」の記事の部分に、「赤文眸子ヲ貫ク傷害ノ相ト為ス」と記載されている。これは、聖徳太子が崇峻天皇の目に赤い筋が走っているのを観て、崇峻天皇の身に危険が及ぶことを予言したものである(巻之四、3ウ)。それに対して、五天良空は、本書の注釈書で、『神相全編』を引いてその正しさを説いている(巻之四、7ウ)。

『聖徳太子伝』の記述によれば、聖徳太子は、日本で最初に観相を受け、最初に観相を行った人物であったため、日本の観相師からは今なお「観相の始祖」と仰がれている。

進ト云ヒ懐寵ア位ハ國之姦人ト云ルニテ知ヘシハ赤文貫眸子傷害相トハ眸ハ瞳也赤文ハ赤脈ナリ神相全編曰眼中ニ有赤脈貫眸子者非肉不食男兵死女産死矣天皇ノ眼中赤脈人見ク底徴也要是御傷害ノ相也但太子此

『聖徳太子伝』補註の『神相全編』を引いた部分

下王躬實有仁君相然恐非命忽至伏請能守左右勿容姦人天皇問之何以知之太子曰赤文貫眸子為傷害相天皇引鏡而視之大驚太子謂左右曰陛下之相不可相博是過云因也

『聖徳太子伝』の聖徳太子が観相する場面

② 神相全編 (個人蔵) / 陳搏 撰・袁忠徹

明清版から簡略な 3 巻本にまとめ直された慶安 4 年(1651)刊の和刻本。明清版がいずれも 9~12 巻の大部なものなのに対して、和刻本は簡略な内容ながら、文字の訂誤を施している点に特色がある。ただし、本書の誤りはさらに『神相全編正義』によって改められ、それはさらに昭和 15 年(1940)刊の「易学教科書」版によって改訂された。なお、本書の、人相を「貴相」「威相」などの八相六面に分類した絵は、浅井了意撰の『安部晴明物語』に反映された。

すずかのおきな

鈴鹿翁のはなし

③ 本朝列仙伝 (田中玄順 国文学研究資料館蔵 ヤ 1-139-1~4)

貞享3年(1686)の刊行、田中玄順の編集。田中玄順は、本書で、院政期に大江匡房の手により編纂された『本朝神仙伝』に登場する神仙たちのほかに、独自に選んだ神仙を加えている。『本朝神仙伝』以外にも、やましろのおおえのおうじ かきのもとひとまる おのたかづら ありわらの山背大兄王子、柿本人丸、小野篁、在原業平などの俗人まで仙人としているのが特徴的。

本書に登場する鈴鹿翁(下図赤丸)は、吉野に隠棲した大海人皇子に「帝王の気」があることを観て、皇子を仙郷に誘って娘と娶せる。林羅山『本朝神社考』にも同話を引く。聖徳太子の観相のはなしと併せて、日本の観相の始まりとして著名。



『鈴鹿翁』第二冊六才。

水野南北のはなし

④ 水野南北『南北相法』 (個人蔵)

⑤ 神坂次郎『だまってすわれば』 (個人蔵)

水野南北(宝暦10年(1760)-天保5年(1834))は、江戸時代中期の頃の観相学の大家で、当時、日本一の観相家といわれた。『南北相法』(4-④)の扉に聖徳太子の名があるのは、当時の観相家達が聖徳太子を「観相の始祖」と仰いでいたからである。南北は若い頃は酒とばくちと喧嘩に明け暮れる日々だったが、易者に陰難の相と死相が出ていると言われて、観相に開眼して自らの相を変えた。また、食事を慎ましくする「節食開運説」を唱えた人物でもあり、その生涯は神坂次郎『だまってすわれば』に詳しい。